

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.270

2015年11月

カンボジアとラオスにおいてサテライトキャンパス入学式及び開校記念式典を挙

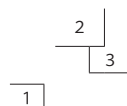


目次

●ニュース	
カンボジアとラオスにおいてサテライトキャンパス入学式及び開校記念式典を 挙行	3
平成27年度名古屋大学公開講座を開講	4
GaN 研究コンソーシアムを発足	5
中国交流センター10周年記念式典及び日中環境シンポジウムを開催	6
名古屋大学職員採用職場説明会を開催	6
平成27年度秋季卒業式を挙行	7
G30学部プログラム卒業パーティーを開催	7
平成27年度秋季入学式を挙行	8
名古屋大学・東海地区大学広域ベンチャーファンドを創設	8
●知の未来へ	
畑作物の耐湿性向上を目指して	9
高橋 宏和（大学院生命農学研究科助教）	
●知の先端	
武力紛争からの脱却と平和の定着－紛争に強い社会をつくるために	10
西川 由紀子（大学院国際開発研究科准教授）	
●部局ニュース	
解剖弔慰祭を挙行	12
農業ふれあい教室を開催	12
宇宙地球環境研究所看板上掲式を挙行	13
第21回博物館特別展を開催	13
展示会「伝染病と闘ってきた」及び特別講演会を開催	14
●名大を表敬訪問された方々	15
●新たに締結した学術交流協定	15
●構成員を対象とした研修	16
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成27年9月16日～10月15日	16
●イベントカレンダー	20
●ちょっと名大史	
もう一つの豊川キャンパス ― 岡崎高師と豊川分校 ―	24

カンボジアとラオスにおいて サテライトキャンパス入学式及び開校記念式典を挙行





- 1 ラオスサテライトキャンパス開校式の様子
- 2 ラオスサテライトキャンパス開校式であいさつする総長
- 3 カンボジアサテライトキャンパス入学式の様子

2015年度「アジア諸国の国家中枢人材養成プログラム」の入学式が、10月8日(木)にカンボジア、13日(火)にはラオスにおいて挙行されました。ラオスでは、同時にサテライトキャンパス開校記念式典も挙行されました。

「アジア諸国の国家中枢人材養成プログラム」は、各国の政府等機関の幹部及び将来のナショナル・リーダーとして活躍が期待されている若手人材等を対象とし、現地に設置されたサテライトキャンパスと本邦キャンパスとの連携による博士課程プログラムです。

昨年度、本プログラムが開始されると同時にカンボジア、モンゴル、ベトナムにサテライトキャンパスが設置されました。初年度は、大学院法学研究科、大学院医学系研究科、大学院生命農学研究科、大学院国際開発研究科がプログラムを提供しており、今年度から新たに大学院環境学研究科がプログラムを開始します。

2年目となるカンボジアでは、10月8日(木)に2015年度入学式が挙行され、学生の入学を祝いました。カンボジアでは、全サテライトキャンパス入学生8名の内5名の学生が入学し、入学式には、カンボジア政府から、教育・青年・スポーツ省、農林水産省、司法省、保健省をはじめ6省庁の長官、副長官などが出席し、カンボジアにおける本プログラムへの関心の高さがうか

がえしました。本学からは、松尾総長、渡辺理事、磯田アジアサテライトキャンパス学院長をはじめ関係部局の教職員が出席しました。

入学式では、総長のあいさつの中で、学生への祝辞とともに、「名古屋大学

松尾イニシアティブ NU MIRAI 2020」で謳われている「アジアと学び世界に挑む人材の育成」の重要性が述べられました。その後の来賓あいさつでは、カンボジア政府を代表して、サムディ・シーワタナ教育青年スポーツ省副長官及び日本政府を代表して鴨志田尚昭在カンボジア日本大使館参事官から、本プログラムへの期待が述べられました。入学生からは、カンボジアで在職したまま博士学位を取得できる機会を得られたことに対する感謝や、この学びの機会を生かして、カンボジアの発展に貢献していきたいと抱負が述べられました。

10月13日(火)には、ラオス国立大学において、ラオスサテライトキャンパスの開校記念式典及び入学式が挙行されました。式典には、スッコンセーン・サイニャルット ラオス国立大学学長やティ・ポムサマック ラオス農林省



副大臣、鈴木亮太郎在ラオス日本国大使館公使、本学からは、総長、市橋理事、竹下事務局長らが出席し、両国関係者合わせて約120名がラオスサテライトキャンパスの開校及び学生の入学を祝いました。

式典では、来賓から、本学のこれまでのラオスにおける貢献に対する感謝とアジアサテライトキャンパスへの期待が述べられ、総長からも、入学生への期待とともに、本学のアジアにおける人材育成を通じたアジアへの貢献及びアジアと学ぶことで世界トップレベルの基幹研究大学になるという目標が述べられました。

式典後には、ラオス国立農林業研究所 (NAFRI) とラオス国立大学法律政治学部に移し、サテライトキャンパスのテープカットを行いました。

平成27年度名古屋大学公開講座を開講

平成27年度名古屋大学公開講座が、8月18日(火)から10月15日(木)までの間、ES総合館ESホールにおいて開講されました。本講座は、本学の研究成果を広く一般に紹介することを目的に毎年開講されており、今年で47回目となります。

当初、公開講座は名古屋市教育委員会との共催で、名古屋市教育館を会場として開催していました。昭和50年からは名古屋大学単独での開催となり、毎年100名以上の方に参加いただいています。

今年度は「秩序と混沌」をテーマに全15回の講義が行われました。秩序と混沌の対立は、均質性と異質性、必然と偶然、調和と不調和など、さまざまな言葉で捉え直すことができます。光があたる秩序は望ましいもので、光があたらない混沌は忌避すべきものでしょうか。このふたつの間にある緊張関係に注目して、文系、理系、医学などの様々な分野で最先端の研究をしている本学の教員が講義を行いました。その幅広い観点に、講義終了後には受講者から講師を務めた教員に対して多数の質問が投げかけられるなど、興味の深さがうかがえました。



講義の様子

10月15日(木)に行われた閉講式では、宇澤社会連携推進室長があいさつを行い、平成19年度から導入している受講者への表彰制度に基づき、平成10年度以降に5年参加した6名の方に表彰状を、10年参加した3名の方と15年参加した5名の方に表彰状と記念品を贈呈しました。また、受講者126名のうち講義に10回以上出席した100名の方には修了証書が発行されました。

また、公開講座の開講に先立ち、7月5日(日)から9月6日(日)の毎週日曜日には、東海ラジオ放送から、ラジオ放送公開講座「名古屋大学リレーセミナー」として全10回の放送を行いました。



表彰式の様子

GaN 研究コンソーシアムを発足



記者会見での赤崎、天野両教授と幹事機関一同による記念撮影

GaN 研究コンソーシアムが、10月1日(木)、本学、名城大学、名古屋工業大学、豊田工業大学、産業技術総合研究所、物質・材料研究機構の6機関が幹事機関となり、発足しました。本コンソーシアムは、省エネルギーに資する材料として注目されている GaN（窒化ガリウム）を中心的な材料として、世界をリードする省エネルギーイノベーションの創出を目的に設立されました。世界をリードしている GaN の研究ポテンシャルを核にして、産学官の密接な連携のもとオープンイノベーションの拠点を名古屋地区に創設し、革新的な知の創出から、橋渡し、社会実装までの一貫したプロセスを産学官で共創することによる、イノベーションエコシステムの確立を目指して活動します。コンソーシアム設立に係る世話人代表は、学術研究・産学官連携推進本部長である財満副総長が務めます。

10月2日(金)には、ナショナルイノベーションコンプレックス（NIC）において、GaN 研究コンソーシアムの発足に係る記者会見が開催されました。記者会見には、赤崎 勇特別教授、天野 浩未来材料・システム研究所教授及び幹事機関の代表者が出席し、報道陣からの質問に対応しまし



シンポジウムでの戸谷文部科学審議官による来賓あいさつ

た。赤崎特別教授からは、GaN 研究の発祥の地である名古屋を中心にコンソーシアムが発足したことを歓迎するとともに、関係者一同身を引き締めなければならない旨が述べられました。

また、10月14日(水)には、名古屋ルーセントタワーにおいて、GaN 研究コンソーシアムの発足記念シンポジウムが開催されました。シンポジウムでは、天野教授による冒頭あいさつの後、文部科学省から戸谷一夫文部科学審議官、内閣府から松本英三大臣官房審議官（科学技術・イノベーション担当）、経済産業省から福島 洋大臣官房審議官（製造産業局担当）から来賓あいさつがありました。続いて、ジャヤント・バリガ ノースカロライナ州立大学教授、大森達夫内閣府 SIP プログラムディレクター、篠島 靖トヨタ自動車パワーエレクトロニクス開発部担当部長から、特別講演が行われました。その後、コンソーシアムの今後の活動について財満副総長から説明があり、フロアとの活発な意見交換が行われました。閉会あいさつには、松尾総長が登壇し、コンソーシアムへの協力と高い期待が述べられました。なお、当日は、国・地方等から5機関18名、大学等から22機関78名、企業から35機関76名、合計62機関172名の参加者がありました。コンソーシアム未参加機関からの参加も多数あり、シンポジウム終了後には新たにコンソーシアムへの入会を希望する機関が複数ありました。

中国交流センター10周年記念式典及び日中環境シンポジウムを開催

中国交流センター10周年記念式典が、9月22日(火)、上海において開催されました。2005年11月に、本学初の全学的海外拠点として設置された名古屋大学上海事務所は、その活動範囲を中国全土に広げ、2014年に中国交流センターへ改称、今年10周年を迎えました。

式典は、松尾総長の開式の辞に始まり、片山和之在上海



開式の辞を述べる総長

日本国総領事館総領事、平野眞一本学元総長ら来賓の方々よりあいさつが述べられました。その後、甲斐憲次環境学研究科教授ほか2名の研究者による環境をテーマとした基調講演、張紹良中国交流センター長によるセンターの活動報告が行われ、引き続き、中国語研修でのホームステイ受け入れ調整などセンターの活動を支援いただいている名古屋大学全学同窓会北京支部及び上海支部の関係者へ、同センター幹事としての委嘱状交付式を執り行いました。式典には本学の協定校や全学同窓会などから、約100名の出席があり、式典終了後にはレセプションを開催し、和やかな雰囲気の中での閉会となりました。翌23日(水)には、「Environmental Issues in China」と題した日中環境シンポジウムが開催されました。中国の協定校からの講演者が、中国における環境問題をテーマとした研究発表を行い、上海交通大学の学生等も参加して、活発な議論が展開され、日中双方の環境問題に対する意識の高さが表れていました。

中国交流センターは、学术交流、広報活動、留学生の派遣・受け入れなど今後も様々な活動を行い、それらの活動が日中間の架け橋となり、より一層の交流が行われることが期待されます。

名古屋大学職員採用職場説明会を開催

東海・北陸地区国立大学法人等職員採用試験の合格者を対象とした名古屋大学職場説明会が、9月29日(火)、豊田講堂及び野依記念学术交流館において開催されました。

まず、豊田講堂において松尾総長のあいさつの後、竹下事務局長による講話、大学の概要、事務職員の役割や業務内容、今後の面接等の日程について説明がありました。

引き続き、野依記念学术交流館に会場を移し、教務・学生サービス、国際交流、企画・評価、研究協力・社会連携、財務・経理、総務・広報、病院・医療支援、施設管理(電気、機械、建築)の8つのブースに分かれ各所属の担当者

による個別業務の内容紹介が入替制で行われました。

さらに、先輩の経験を伝えるコーナー、福利厚生、給与等の処遇説明コーナーが設けられ、参加者からの具体的な質問に職員が個別に対応しました。

当日は、天候にも恵まれ、240名を超える参加があり、それぞれ真剣に説明を聞き、メモをとる姿が見受けられました。

また、学術情報サービス(図書)、教室系技術(電気、機械、化学、物理、電子・情報)については、実際の職場に場所を移して業務説明が行われました。



各担当者による業務説明



先輩の経験を伝えるコーナー

平成27年度秋季卒業式を挙行

平成27年度名古屋大学秋季卒業式が、9月28日(月)、豊田講堂において挙行されました。

今年度の秋季卒業生及び修了生は、学部35名、修士課程及び博士課程前期課程76名、医学博士課程及び博士課程後期課程36名の計147名となりました。

今年度は、国際プログラム群（G30）の学部の第1期生



総代の辞（法学部卒業生クウォン・キ・ジュンさん）

が卒業することとなり、学部と大学院の合同で執り行われました。

また、卒業生・修了生の多くは、G30等の外国人留学生であり、式典はすべて英語で行われる等グローバルに相應しい雰囲気で行われました。

式典では、松尾総長から各学部の卒業生及び各研究科の修了生の代表に学位記が授与され、次いで、卒業生及び修了生に対し本学における課程を修了したことへのお祝いの言葉と、本学において学んだ知識や技術をさらに研鑽し、世界の発展のために貢献することを希望する旨のはなむけの言葉が贈られました。

これを受け、卒業生を代表して法学部のクウォン・キ・ジュンさんから、修了生を代表して大学院工学研究科のチョン・ピョンオさんから、指導教員をはじめとする教職員や多くの友人・家族の支えにより、卒業・修了の日を迎えることができたことへの感謝の気持ち、また、本学での勉学は大変ではあったが、本学で学び経験したことを今後の人生の糧とし、卒業・修了後もそれぞれの道で活躍していきたい旨の「総代の辞」が述べられました。

G30学部プログラム卒業パーティーを開催

国際プログラム群（G30）学部プログラム卒業パーティーが、9月28日(月)、ユニバーサルクラブにおいて開催されました。これは今年度、本プログラムの開始から4年が経ち、本プログラムの学部生から初めて卒業生を送り出すことを記念して行われ、卒業生のほか、指導教員、G30特任教員、海外から駆けつけた卒業生の保護者など、100名近



卒業生と歓談する総長

くが出席しました。

松尾総長からは、卒業生に対し4年間の研究活動に対するねぎらいの言葉とともに、保護者に対しては4年間の経済的サポートに対する感謝の言葉が述べられました。また、卒業後は本学や国内外の大学院への進学や、就職など、道は様々になるが、どの道に進んでも名古屋大学の卒業生であることに誇りを持って益々の活躍を期待している旨の言葉がかけられました。

会場には、4年間の思い出が詰まったスライドも投影され、時にはそのスライドを見ながら、当時を振り返り談笑している学生の姿も見受けられました。卒業生が4年間の思いを述べる企画では、それぞれの学生が、指導教員に対する感謝の言葉や今後の目標、日本での苦労話などを話していました。

卒業生たちは、時に校旗をバックに総長と記念撮影をしたり、友人同士で記念撮影をするなど、終始和やかな雰囲気のもと、1時間の卒業パーティーを楽しみ、その後、それぞれの所属学部で行われる卒業セレモニーに向かいました。

平成27年度秋季入学式を挙

平成27年度名古屋大学秋季入学式が、10月5日(月)、豊田講堂において挙

行されました。今年度の秋季入学生は、学部52名、大学院192名(修士課程及び博士課程前期課程101名、医学博士課程及び博士課程後期課程91名)の総勢244名となりました。

秋季入学生の多くは、留学生特別コース、医学系研究科



祝辞を述べる総長

修士課程医科学専攻医療行政コース(ヤング・リーダーズ・プログラム)、「大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業(G30)」により設置された国際プログラム群等、海外からの留学生です。

今年度は秋季入学生の数が大幅に増え、東アジア、東南アジアをはじめとする世界各国から入学した留学生が出席する中、式典はすべて英語で行われ、本学のグローバル化がより感じられる入学式となりました。

式典は、本学交響楽団が演奏する「カノン」(パッヘルベル作曲)で始まり、松尾総長から祝辞が述べられ、続いて、役職員等の紹介の後、理学部のグエン・ズオン・ティンさん(ベトナム)が入学生総代として、入学にあたって学生としての本分を全うすることを宣誓しました。

閉式後は、豊田講堂内で、晴れやかな表情で記念撮影をする入学生の姿が見られました。

名古屋大学・東海地区大学広域ベンチャーファンドを創設

本学、岐阜大学、豊橋技術科学大学、名古屋工業大学及び三重大学と、日本ベンチャーキャピタル株式会社は、東海地区の大学に由来するベンチャーに投資するベンチャーファンド「名古屋大学・東海地区大学広域ベンチャーファンド」の創設について合意し、10月6日(火)に記者発表を行いました。



会見後の記念撮影

「名古屋大学・東海地区大学広域ベンチャーファンド」は、大学の重要なミッションの1つである研究成果の社会実装を実現し、その効果的な形態であるベンチャービジネスを成功させるためのファンドです。主たる投資先として、上記5大学に由来する「研究シーズによって起業したベンチャー」、「研究成果を導入あるいは導入予定のベンチャー」、「卒業生や在学生在が創業または役員を務めるベンチャー」を対象としています。先行する官民ファンド、過去に設置された大学ベンチャー支援ファンドとは異なり、東海地区広域の複数の大学が協力して人材や知的財産等の資源を結集し、民間ベンチャーキャピタルとの連携により破壊的イノベーションの実現を目指すことを特徴としています。

本ベンチャーファンドは、日本ベンチャーキャピタル株式会社が運営し、アーリーステージにある上記5大学のシーズ掘り起こしを行うとともに、大学の独自運営により研究シーズの育成を行うギャップファンド、研究者や学生のアントレプレナーシップ教育等を連動させることで、技術開発と人材育成の両面から、将来の東海地区の産業振興を見据えています。

畑作物の耐湿性向上を目指して

大学院生命農学研究科助教
高橋 宏和

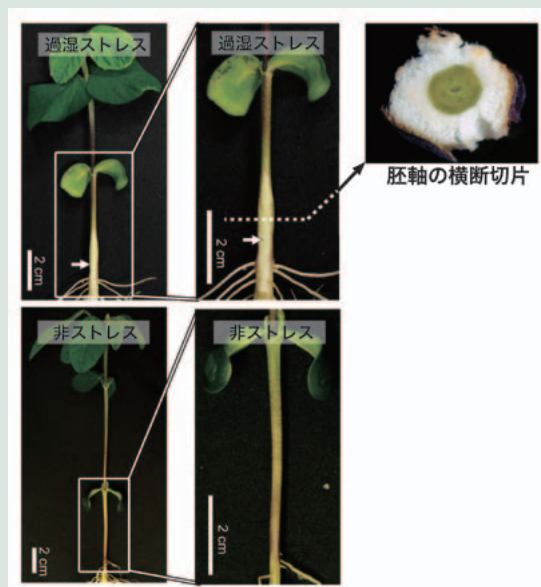


図1 ダイズ胚軸における二次通気組織の形成
ダイズは、土壤中の水分が過剰になるような過湿ストレス時に胚軸や根、根粒に白いスポンジ状の二次通気組織を形成する。非ストレス時には、二次通気組織は形成されない。矢印は二次通気組織を示す。

に二次通気組織を常につくらせることを目指して研究を行っています。これまで過湿土壤中で形成されること以外、二次通気組織の形成機構はほとんどわかっていませんでしたが、最近の私たちの解析からこの二次通気組織の形成には光合成により合成された糖が篩部を通して輸送されることが重要であることが明らかになってきました(図2)。また、この二次通気組織における網羅的遺伝子発現解析等からこの二次通気組織形成には、低分子ペプチドが関与することもわかってきました。今後はこれらの知見をもとに、二次通気組織形成機構を明らかにするとともに、ダイズの耐湿性の向上に貢献して行きたいと考えています。

高温、低温、乾燥など植物の生育に悪影響を及ぼす環境ストレスは数多くありますが、私はそのような環境ストレスの中で土壤の水分が過剰になるストレス(過湿ストレス)について研究を行っています。地球温暖化にともない世界の降水量は大きく変動し、日本では降水量が増加することが予測されています。植物の成長にとって水は必須ですが、土壤中の水分過剰は根の呼吸を阻害し、根腐れなどを引き起こし、植物の生長に悪影響となります。畑作物の代表であるダイズやコムギ、トウモロコシなどは土壤中の水分過剰によりその生育が大きく影響される植物です。従って、これら畑作物の耐湿性(過湿ストレスへの耐性)を向上させることは、日本における重要な農業課題の一つとなっています。

過湿土壤における問題の一つは、酸素不足により根の呼吸が阻害されることであるため、根に酸素を供給できるようになれば問題の一つが解決することになります。そこで、私はダイズを材料に根への酸素の供給機構について研究を行っています。ダイズは耐湿性の低い作物ですが、過湿土壤における酸素の供給機構を全く持っていないわけではありません。ダイズは、土壤中の過湿ストレス時に二次通気組織と呼ばれる白いスポンジ状の組織を形成します(図1)。この組織は、細胞と細胞の隙間が大きい組織であるためこの隙間の中を空気が根へ供給されます。二次通気組織は、必ず水面の少し上まで形成されることから、空気の通路だけではなく、取り込み口としても重要な組織になります。しかしながら、ダイズは過湿ストレスを施した後、二次通気組織を十分に形成するまでに1週間以上かかるため、その間に根がダメージを受けてしまいます。そこで、私はこの二次通気組織形成機構を明らかにして、ダイズ

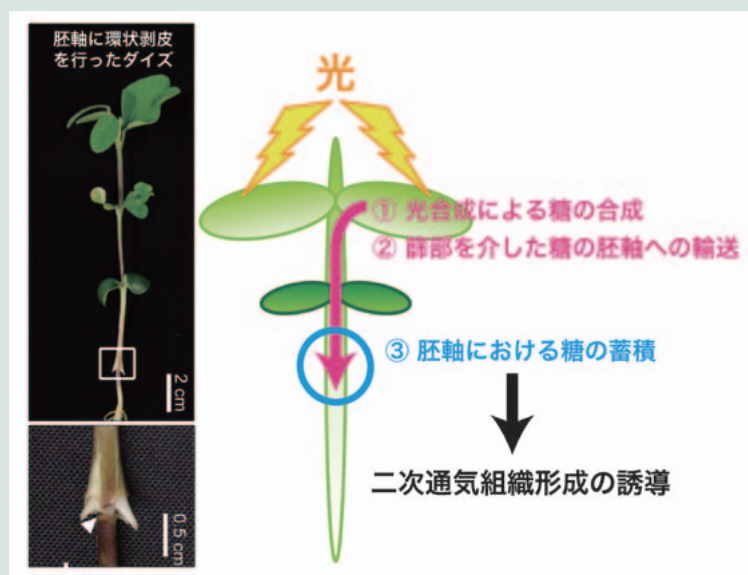


図2 胚軸の環状剥皮による二次通気組織形成への影響
ダイズの胚軸に熱処理による環状剥皮を行うことで、篩部を壊死させた。その後、過湿ストレスを与えると熱処理箇所の上では二次通気組織が形成されるが、下では二次通気組織は形成されない(左図)。矢じりは、環状剥皮を行った部位を示す。したがって、二次通気組織形成には篩部を介した制御機構が存在すると考えられる。二次通気組織形成には、過湿ストレスに加え、光合成で合成された糖が、篩部を通して胚軸へ輸送される必要がある(左模式図)。

武力紛争からの脱却と平和の定着—紛争に強い社会をつくるために

西川 由紀子 大学院国際開発研究科准教授

世界のテロと武力紛争

「イスラム国」と名乗る中東の過激派組織の動きを通して、近年の武力紛争やテロについて報道される機会が増えました。20世紀には人権や人道という概念が広く認識され、戦争やジェノサイド（大量虐殺）が人類の歴史において初めて「悪」と捉えられるようになりましたが、世界では武力紛争や組織的暴力は絶えていません。紛争の予防と平和構築は、紛争経験国のみならず、その近隣諸国を含め、武力紛争勃発の恐れがある国の発展を考えるうえで重要な課題となっています。

グローバル化時代の武力紛争

第二次世界大戦以降、1990年代前半まで武力紛争の数は増加していました。その後、武力紛争の数は暫く減少していましたが、2005年頃から再び増加傾向を示しています。こうした数の変化に加えて、武力紛争の質の変化もみられます。第二次

世界大戦頃まで注目されていた国家間の紛争は減少し、1990年代前半までに急増したのが国内紛争です。特に1980年代以降の紛争は、グローバル化のもとで複雑化しました。グローバル化と情報通信技術の発展により、政府や国家機関だけではなく、犯罪・武装組織も、これまでより迅速に武器や資金の調達を行えるようになりました。こうした組織は、地域的もしくは世界的なネットワークを拡大しながらテロや武力紛争に関わっています。

多様な犯罪・武装組織が関わる紛争を経験した国では、その複雑さゆえに、国際連合（国連）による平和維持活動（PKO）が成功を収めても、和平後や撤退後、5年以内に再び紛争に陥る割合が5割にもものぼります。そのため、紛争の解決だけではなく、紛争後の復興と平和の定着をいかに行うのかが問われています。構造的に紛争に強い社会を構築していくことが、グローバル化時代には求められています。

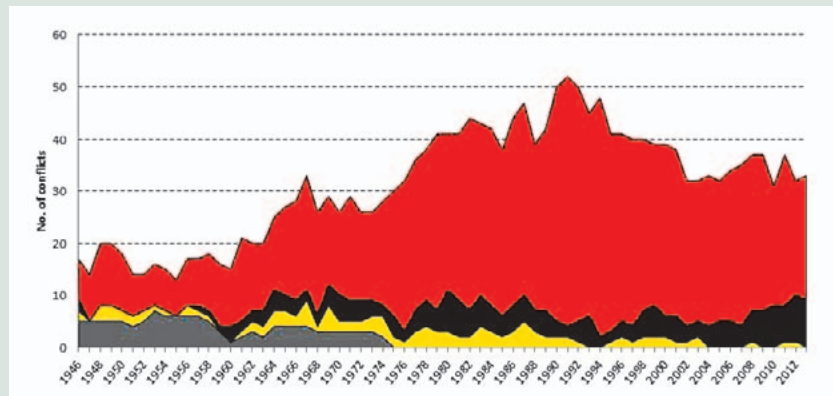


図 1946—2013年武力紛争数の推移

グラフは1946年から2013年までの紛争数の変化を表している。グラフ中の赤色は国内紛争の数、黄色が国家間紛争の数、黒色が国際化した紛争数の推移を示している。Themnér, Lotta & Peter Wallensteen, 2014 “Armed Conflict, 1946–2013.” *Journal of Peace Research* 51(4)から引用。

紛争後の復興と平和の定着

これまでの研究では、国内紛争の勃発とその継続には、経済レベルや民主化の進み具合、人間開発のレベルが関連していることが指摘されています。したがって武力紛争の予防と平和構築の観点からも経済支援や政治改革が行われるようになりました。しかし経済成長している国が必ずしも政治的に安定しているとは限りません。多くの課題を抱える武力紛争経験国において、経済復興を達成しつつ政治的な安定を維持するために、何を優先して取り組むべきなのかについては十分な検討が必要です。

このような理由から、自身の研究では、冷戦終焉前後に武力紛争の終焉を迎えた30か国の経済、政治（ガバナンス指標）、人間開発および治安に関するデータを経年変化が観察できるよう収集し、それぞれの相関を明らかにする試みを行っています。特に経済成長や政治的安定と関連が強い要素を特定し、優先的に取り組むべき課題を確定していきます。

これまでの分析では、紛争直後においては、統治形態（民主主義体制かどうか）は、経済のパ

フォーマンスや暴力の管理の良し悪しにそれほど強く関連していないことが明らかになっています。しかしこれは、武力紛争後の経済レベルが低い状況での相関関係です。経済レベルが既に回復して更なる成長を期待する段階では、これらの関係も変化する可能性があり、初期条件によって相関が固定されていると考えるべきではないでしょう。

今後の研究について

現在行っている研究を通して明らかになった相関関係をもとに、いくつかの紛争経験国を事例として取り上げ、それぞれの国では、何が経済成長に貢献したのか、何が政治的安定に有効であったのか、因果関係を解明していきます。ルワンダ、カンボジアやボスニア・ヘルツェゴビナなど、紛争終焉から20年余りを経た国に焦点を当て、紛争の予防と平和構築に貢献する要件を解明していきたいと思っています。このような研究の積み重ねが、武力紛争の解明と予防につながると考えています。



写真 紛争後の街並み。ボスニア・ヘルツェゴビナのモスタル。

英国ブラッドフォード大学大学院で平和学修士および博士号を取得。ボスニア・ヘルツェゴビナ、東ティモール、ケニアなどで人道支援活動および研究などに従事。その後、タイ、国立チュラロンコン大学平和・紛争学研究センター、国立マヒドン大学大学院専任講師を経て2010年から現職。ゼミではアフガニスタンやコンゴ民主共和国などの紛争国や東南アジア諸国からの留学生とともに、紛争予防や紛争経験国の復興について研究を行っている。
趣味は愛犬モカと遊ぶこと。

にしかわ ゆきこ



解剖弔慰祭を挙行

●医学部

医学部は10月9日(金)、医学の教育研究のために御献体された故人を慰霊するため、解剖弔慰祭を執り行いました。本年度も御遺族をはじめ、教職員、学生ら約300名が参列し、故人の御冥福をお祈りしました。

式典では、高橋医学部長から「医学への御献体に対し心からの敬意と感謝の意を捧げるとともに、医学医療の進



弔慰祭の様子

歩・発展及び医師・医学研究者の育成のために一層努力する覚悟であります」と慰霊のことばが述べられました。

また、学生を代表して医学部医学科2年秋葉嘉将さんが「多くの方々の御協力のもと医学を学べることに感謝し、御献体してくださった皆様の御遺志を無駄にせぬよう今後とも勉学に励み、将来の医療の発展のために努めていきます」と御霊と御遺族に対して誓いました。

式典に引き続き、解剖供養塔に御遺族、教職員、学生がお参りました。

なお、今回供養された献体数は、系統解剖48体、病理解剖15体で、医学部創設以来の献体総数は17,585体となりました。

農業ふれあい教室を開催

●大学院生命農学研究科

大学院生命農学研究科附属フィールド科学教育研究センター東郷フィールドは、10月3日(土)、農業ふれあい教室「親子農業体験-サツマイモとラッカセイの収穫」を開催しました。東郷フィールドでは、地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」の一環として、平成14年度から毎年、近隣地域の児童・生徒が農業や自然を体験・学習する



サツマイモの観察

農業ふれあい教室を開催しています。今回は、近隣地域の19家族計51名が参加しました。

収穫作業を始める前に、東郷フィールド内の農業館で、5月末に植付けたサツマイモとラッカセイの4カ月間の成育を記録した写真を見ながら、これらの作物の育ち方について説明を受けた後、畑に出かけ、土の中で育ったサツマイモとラッカセイを観察し、それぞれの特徴について学習しました。参加者にとって土の中で育ったラッカセイを見るのは初めての経験で、熱心に観察していました。収穫作業では、親子で協力しながらスコップや移植ごてを使ってサツマイモを掘り、ラッカセイは株ごと引き抜いて食べごろのさやを集めました。最後に、朝から準備しておいた蒸かしイモを味わい、秋の味覚を楽しみました。

当日は天候にも恵まれ、参加者は親子で協力しながらサツマイモとラッカセイを収穫しました。参加した児童は、担当スタッフに質問しながら、積極的に生き生きと取り組んでいました。保護者からは、親子で学習しながら楽しめる同様の企画を次年度もぜひ開催してほしいとの要望が寄せられ、好評のうちに農業ふれあい教室を終了しました。

宇宙地球環境研究所看板上掲式を挙

●宇宙地球環境研究所

宇宙地球環境研究所は、10月1日(木)、研究所共同館玄関において、同研究所の看板上掲式を挙りました。

同研究所は、宇宙科学と地球科学を結びつける全国で唯一の研究所として、太陽地球環境研究所、地球水循環研究センター及び年代測定総合研究センターの3つの研究組織が統合し、新しい附置研究所として設立されたものです。



看板上掲式の様子

同研究所のミッションは、地球・太陽・宇宙を1つのシステムとしてとらえ、そこに生起する多様な現象のメカニズムと相互関係の解明を通して、地球環境問題の解決及び宇宙にひろがる人類社会の発展に貢献することを目的としています。

上掲式には、雨天にもかかわらず、松尾総長、松下理事、また、同研究所から町田所長、石坂副所長、草野副所長をはじめ、多数の研究所関係者が出席して行われました。

はじめに、町田所長から、国内外の様々な知識、能力、技能を持った人々の総力を結集して分野横断的な課題に関する融合研究を強力に推進することで、今日の喫緊の課題である地球環境問題を解決し、人類社会の発展に大きく貢献していきたい、と抱負が述べられました。

続いて、総長から、本学はQSトップユニバーシティの分野別ランキング「地球・海洋科学」の分野において現在世界48位であるが、新しい研究所の設立によって、さらに本学の強みである「宇宙・地球・海洋分野」の研究力が高まると、同研究所への期待が述べられました。

その後、関係者による看板上掲が行われ、同研究所の今後の発展を祈念しました。

第21回博物館特別展を開催

●博物館

博物館では、5月26日(火)から9月26日(土)の間、第21回特別展「関戸弥太郎と宇宙線望遠鏡」を開催しました。東山キャンパス南東側の頂には、銀色に輝く丸い屋根の「宇宙線ドーム」が建っています。この中には、直径5m、長さ12mの筒が2本並んだ巨大な双眼の望遠鏡、通称、宇宙線望遠鏡3号が収まっています。これは、理



展示の様子

学部物理学教室で宇宙線研究室(通称、H研)を創設した故関戸弥太郎教授が、宇宙から飛来する高エネルギー放射線である宇宙線を観測するために建てられた施設であり、今年はじめにその役割を終え、解体が行われました。

この特別展では、2つの異なるストーリーを追えるように展示が構成されました。1つは、関戸教授の人物史を、生い立ちから研究者としての歩み、周囲の科学者たちとの関わりまで、数多くの文書・写真資料とともに紹介したものです。もう1つは、宇宙線についての基本的な情報や、解体された宇宙線望遠鏡3号の一部や関戸教授が研究に使用した道具類とともに、宇宙線望遠鏡のしくみや構造を詳しく紹介したものです。期間中には、2度の特別講演会に加えて、コンサートを1度開催し、展示期間中の来館者は延べ11,000名を超えました。

展示会「伝染病と闘ってきた」及び特別講演会を開催

●附属図書館医学部分館

附属図書館医学部分館は、6月10日(水)から9月30日(水)までの間、展示会「伝染病と闘ってきたー虎列刺 室扶私 痘瘡 實布埜利亞 黒死病 そしてー」を開催しました。これは、同館4階にある医学部史料室の所蔵品の中から、「伝染病予防法」が施行された1897年前後の人間と伝染病との歴史に関連する古医書、掛図、医療器具などを展示す



展示会の様子

る企画です。

明の医学者である呉有性による『温疫論』、伊藤圭介とともに種痘所を開いた鈴木容藏の手記「種痘所用留」を含む『尾州徳川藩種痘所記録』、明治中期の種痘用具一式、愛知医学校（名古屋大学の前身校）時代の講義ノート『虎列刺』、愛知医学校の一等教諭川原 汎が翻訳した『虎列刺病拔失爾々斯論』、コッホ博士が来名した際の北里柴三郎らとの記念写真、關東都督府臨時防疫部による『明治四十三、四年「ペスト」流行誌』、後藤新平が題字を書いた掛図『通俗衛生図解』、戦後当時の切手が貼られた伝染病患者届出票など、多彩な資料は多くの来館者の関心を集めました。

また、期間中の7月10日(金)には、疫学、予防医学で著名な青木國雄名誉教授を招き、「わが国の疫病（伝染病）流行とその社会的衝撃」と題する特別講演会を開催し、市民ら40名が聴講しました。紀元前のミイラのあばたの話から始まる天然痘、はしか、ペスト、結核など疫病の流行の歴史をエスプリのきいた話題で辿り、また、あばたの残った韓国の仮面の実物を示し、参加者の知的好奇心を大いに刺激しました。

名大を表敬訪問された方々 [平成27年7月16日～10月15日]

日付	国/地域	訪問者	目的
7月21日	タイ	カセサート大学からシリー・チャイセリ准教授	表敬あいさつ及び博士課程教育リーディングプログラム『『ウェルビーイング in アジア』実現のための女性リーダー育成プログラム』での講義
7月22日	モンゴル	新モンゴル学園からガルバドラッハ・ジャンチブ理事長及び新モンゴル高等専門学校からブヤンジャルガル・シルネン校長	表敬あいさつ及び意見交換
7月30日	モンゴル	モンゴル国立医科大学からアマルサイハン副学長	表敬あいさつ
8月2日～4日	モンゴル	モンゴル教育文化科学省からバーブガイ・ナサンバヤル戦略政策予算局長他6名	表敬あいさつ(文部科学省新世紀国際教育交流プロジェクト・行政官等受入事業による来訪)
8月27日	ポーランド	グダニスク医科系大学からミハエル・ボジニアック教授	表敬あいさつ
9月8日～9日	ウズベキスタン	タシケント工科大学からレイシャン・セイダフメドフ学長他2名	表敬あいさつ及び学内施設見学
9月11日	米国	テキサスA&M大学 ロボット支援探索救助センターからロビン・マーフィー所長	講演
9月30日	ドイツ・タイ	パリ政治学院公共政策大学院からローズヴィータ・ニューウェルズ准教授、マヒドン大学アセアン保健開発研究所からスバ・ペンピッド所長、ユネスコアジア文化センターから柴尾智子上級顧問	表敬あいさつ及び博士課程教育リーディングプログラム『『ウェルビーイング in アジア』実現のための女性リーダー育成プログラム』入講式
10月6日	中国	香港中文大学からジョセフ・スン学長他4名	表敬あいさつ及び学内施設見学
10月7日	中国	東北大学から王 建華副学長他2名	表敬あいさつ及び学内施設見学
10月7日	エルサルバドル	エルサルバドル共和国文化庁からラモン・リーバス長官	表敬あいさつ

新たに締結した学術交流協定 [平成27年7月15日～10月15日]

大学間学術交流協定

締結日	地域/国名	大学/研究機関名
9月9日	ウズベキスタン	タシケント工科大学

部局間学術交流協定

締結日	地域/国名	大学/研究機関名	部局名
7月15日	シンガポール	シンガポール国立大学量子技術センター	多元数理科学研究科・情報科学研究科
7月16日	中国	上海外国語大学日本文化経済学院及び国際文化交流学院	国際言語文化研究科
8月27日	韓国	忠南大学校農業生命科学大学	生命農学研究科
9月4日	スリランカ	スリジャヤワルデネブラ大学経済学部	国際開発研究科
9月16日	米国	オハイオ州立大学教育・人間環境学部	教育学部・教育発達科学研究科

構成員を対象とした研修 [平成27年7月16日～10月15日]

実施日	研修名	目的	参加人数
8月4日(火) 8月6日(木)	大学職員のための図書館活用法 入門編	新聞データベースや辞書データベースの業務での活用を目指す。図書の探し方や、中央図書館の施設についても案内し、図書館活用の基本を身につける	15名
8月5日(水) ～6日(木)	IDL 利用講習会 (中級編)	IDL の開発環境 IDLE の機能説明、プログラム、ダイレクトグラフィックス、信号処理、画像処理、地図データ処理等の実習を含めた講習会	11名
8月5日(水) 8月7日(金)	大学職員のための図書館活用法 発展編	学術情報を情報収集の一環として業務でも活用するために、日本語論文データベース (CiNii Articles) や法令・判例データベース (Westlaw Japan) の利用・活用法を身につける。	13名
8月7日(金)	ENVI 利用講習会	これから ENVI を利用される方を対象に、ENVI を理解し積極的に利用して頂くための講習会	6名
8月27日(木)	ヘッドマウントディスプレイシステム講習会	これからヘッドマウントディスプレイシステムを利用される方を対象に、理解し積極的に利用して頂くための講習会	5名
9月17日(木) 9月29日(火)	NUCT 利用講習会	授業・研修等の担当者で、これから NUCT を利用される方を対象に、NUCT を理解し積極的に利用して頂くための講習会	12名
10月6日(火)	LabVIEW サイトライセンス講習会	これから LabVIEW を利用される方を対象に、LabVIEW を理解し積極的に利用して頂くための講習会	21名

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成27年9月16日～10月15日]

記事	月日	新聞等名
1 吉田英一博物館教授は「ノジュール」という炭酸カルシウムの層が、わずかに数週間で形成され化石になる仕組みを解明	9.16 (水)	中日 (朝刊)
	9.23 (水)	毎日 (夕刊) 日経 (朝刊)
2 斎藤 進理学研究科教授らは動植物の脂肪などに含まれるカルボン酸をアルコールに変化させる新たな触媒を開発した	9.16 (水)	日刊工業
3 朝日地球環境フォーラム2015開催：10月1日、2日 1日目 (全体討論) テーマ「脱炭素社会へ向けて／パリ合意への期待」高村ゆかり環境学研究科教授	9.16 (水)	朝日 (朝刊)
	10. 2 (金)	朝日 (朝刊)
4 深層断面：「三つの枠組み」選択 改革本番 本学は「世界トップ大学と伍して卓越した教育研究を推進」を選択	9.16 (水)	日刊工業
5 時のおもりの監視か防犯か カメラが市民を凝視 池内 了本学名誉教授	9.16 (水)	中日 (朝刊)
6 野外観察園セミナーハウス サテライト展示「ムシの世界—名古屋大学博物館の昆虫標本と切り紙と博物画」開催：7月6日～10月30日	9.16 (水)	朝日 (夕刊)
	9.30 (水)	朝日 (夕刊)
	10. 7 (水)	朝日 (夕刊)
7 ソフトウェアがつくる価値⑩：共通化の達成に必要なものは 当初の制約 守り続ける 森崎修司情報科学研究科准教授	9.17 (木)	日刊工業
8 ブレークスルー2015：非金属触媒の開発 人工アミノ酸 簡単合成 京都大学教授丸岡啓二氏元本学助教授	9.17 (木)	中日 (夕刊)
9 本学は処理能力が4ペタフロップスと日本で2位、世界で20位相当のスーパーコンピュータシステムを導入	9.18 (金)	日刊工業
10 文部科学省は法科大学院への2016年度の補助金算定に向けた5段階評価を公表し、本学は補助金の基礎額90%と最高評価となった	9.18 (金)	日経 (朝刊)
	9.19 (土)	中日 (朝刊) 読売
11 第61回名大カフェ "Science, and Me" 「納豆の起源」開催：25日 横山 智環境学研究科教授が東南アジアでの現地調査をもとに納豆の起源について解説	9.18 (金)	読売
12 第19回自然科学研究機構シンポジウム「宇宙から脳まで 自然科学研究の“ビッグバン”—コンピューターが切り開く自然科学の未来—」開催：20日 豊田講堂で行われ、坪木和久宇宙地球環境研究所教授が伊勢湾台風を再現したシミュレーションなどを説明	9.21 (月)	中日 (朝刊)
13 現場から：名大産学連携一ツ屋根の下 未来社会創造機構「世界を引っ張る」財満鎮明未来材料・システム研究所教授は「これまでの産学連携は研究者個人と一企業という“糸電話方式”だったが、ここは組織と組織で動いている」と語る	9.22 (火)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成27年9月16日～10月15日]

記事	月日	新聞等名
14 御嶽噴火1年：警戒「1」素早く規制 山岡耕春環境学研究科教授は「火山活動は不確定。警戒レベルだけに頼らず、箱根町のようにあらかじめ対応を議論しておく必要がある」と語る	9.22 (火)	読売
15 第33回全日本大学女子駅伝対校選手権大会 東海地区予選会：20日 本学が参加	9.22 (火)	読売
16 太田美智男本学名誉教授がプロジェクトリーダーをつとめる産学官連携支援事業「知の拠点あいち・重点研究プロジェクト」の3テーマの一つ「超早期診断技術開発」が期間5年の最終年度を迎え、研究が多くの試作品として形になっている	9.23 (水)	日刊工業
17 軍事可能研究 16大学が応募 益川敏英本学特別教授は「平和な今のうちに、研究の軍事利用について真剣に考えておくべきだ」と語る	9.23 (水)	中日 (朝刊)
18 ノーベル賞特集：日本人研究者、受賞なるか 受賞者の目 小林 誠本学特別教授	9.24 (木)	日経 (朝刊)
19 ソフトウェアがつくる価値①：ソフトウェアの外部品質と内部品質 使い手側の視点に偏重 森崎修司情報科学研究科准教授	9.24 (木)	日刊工業
20 登山者向け対策に遅れ 情報の質 向上を 東濃地震科学研究所副所長主任研究員木股文昭氏元本学教授	9.24 (木)	毎日 (朝刊)
21 本学学生2名が2003年12月に開店した「café est」が現在も本学の学生38人などで運営され、代表を務める木村友紀さん経済学部2年生は「やっていくうちに店への責任と愛着が湧いてくる。成長できる場です」と語る	9.25 (金)	朝日 (朝刊)
22 ニュースの追跡：人文社会科学は知の泉 水田 洋本学名誉教授が「戦争は友人たちの命を奪い、私たちが学問の自由を奪った」と語る	9.25 (金)	中日 (朝刊)
23 「2016中部の私立大学・短期大学 大学展」開催：27日 本学の入試説明が行われる	9.25 (金)	中日 (朝刊)
24 濱口道成前総長が科学技術振興機構理事長に就任する人事が閣議で承認された	9.25 (金) 9.26 (土) 9.28 (月)	中日 (夕刊) 毎日 (朝刊) 日刊工業
25 忘れない 御嶽山噴火一年④ 名大の覚悟：山岡耕春環境学研究科教授は本学の御嶽山の観測体制強化について「時間がたてば、人の記憶は薄れるのが常。今回の教訓を忘れず、形に残すことが必要だ」と語る	9.26 (土)	中日 (朝刊)
26 御嶽の警告 噴火1年⑤：火山防災 地域ぐるみで 山岡耕春環境学研究科教授が自治体側に「地震計のメンテナンスを手伝ってほしい」と要請	9.26 (土)	読売
27 森島邦博未来材料・システム研究所特任助教が東京電力福島第一原子力発電所2号機は核燃料の70%以上が熔融した可能性があるとの分析結果を日本物理学会で発表	9.27 (日)	読売 朝日 (朝刊)
28 文部科学省の専門家会議「高大接続システム改革会議」が中間まとめを公表し、本学の入試担当者は「まだ情報収集の段階で具体的な検討はこれから」と語る	9.27 (日)	中日 (朝刊)
29 ブックマーク：書籍「科学者は戦争で何をしたか」益川敏英本学特別教授著	9.27 (日)	朝日 (朝刊)
30 どうする？自治会・町内会 活動 現代に合った形に 中田 実本学名誉教授	9.28 (月)	朝日 (朝刊)
31 三好由純宇宙地球環境研究所准教授らと宇宙航空研究開発機構などのグループはオーロラが瞬く仕組みを解明	9.29 (火)	読売 日刊工業
32 郷理事は女性の活躍について「伝統的な分野を除くと研究者が不足している。こうした分野を開拓していけば評価は高くなるはず」と語る	9.29 (火)	日刊工業
33 ノーベル賞発表カウントダウン 赤崎 勇本学特別教授、天野 浩未来材料・システム研究所教授の青色LEDの研究や、益川敏英同特別教授、小林 誠同特別教授の物理学賞受賞が取り上げられる	9.29 (火)	日刊工業
34 あいちサイエンスフェスティバルサイエンストーク シリーズ「生命進化」キュレーターズ・トーク第2回「謎の初期生命―太古代の微化石に迫る」開催：10月1日 杉谷健一郎環境学研究科教授が講演	9.29 (火)	中日 (朝刊)
35 拓く研究人91：原田俊太グリーンモビリティ連携研究センター助教 SiC 結晶製法 高効率化	9.30 (水)	日刊工業
36 本学とタイ国立がんセンターが提携し、本学から医師を派遣して日本製の内視鏡やエックス線装置などを使った診断のノウハウを伝える事業を厚生労働省がはじめる	9.30 (水)	日経 (朝刊)
37 梶村益久医学部附属病院講師らのグループは慢性低ナトリウム血症が、歩行障害、記憶障害などの神経心理学的異常をきたすことを突き止めた	10. 1 (木)	中日 (朝刊)
38 本学は情報文化学部を改組し2017年4月に情報学部 (仮称) を設置すると発表	10. 1 (木)	読売 他4社
39 生きものたちの時間 吉村 崇トランスフォーマティブ生命分子研究所教授⑦：「春告げホルモン」の発見 季節を感じ、体に変化	10. 1 (木)	中日 (朝刊)
40 ソフトウェアがつくる価値②：管理指標値だけで判断しようとしていないか？ 過信せず確認する姿勢を 森崎修司情報科学研究科准教授	10. 1 (木)	日刊工業
41 ノーベル賞 今年も 昨年、赤崎 勇本学特別教授、天野 浩未来材料・システム研究所教授が受賞したノーベル物理学賞について、今年も「素粒子」「宇宙」の分野が有力	10. 1 (木)	朝日 (朝刊)
42 書籍：「天野先生の『青色LEDの世界』」天野 浩未来材料・システム研究所教授著	10. 1 (木)	日経 (夕刊)
43 本学などは窒化ガリウムを活用した省エネルギー技術の共同研究体「GaN 研究コンソーシアム」を設立し、天野 浩未来材料・システム研究所教授がセンター長を務める「未来エレクトロニクス集積研究センター」が中心的な役割を担うことが分かった	10. 1 (木) 10. 2 (金)	読売 日刊工業

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成27年9月16日～10月15日]

記事	月日	新聞等名
44 脅威 スーパー台風 風速60メートル 高潮リスク増大 坪木和久宇宙地球環境研究所教授は「今考えている『最悪』のレベルを上げ、タイムラインなどを整備する必要がある」と語る	10. 2 (金)	毎日 (朝刊)
45 朝日カルチャーセンター名古屋 明治のまなざしが見た「西洋文化」との遭遇：前野みちこ本学名誉教授	10. 2 (金)	朝日 (朝刊)
46 本学や名城大学などの共同研究体「Ga N研究コンソーシアム」が設立し、赤崎 勇本学特別教授は「窒化ガリウムの研究を続けてきた名古屋に、このような組織ができたことは大変うれしい」と語り、天野 浩未来材料・システム研究所教授は「オールジャパンで世界をリードしていきたい」と語る	10. 3 (土)	読売 他2社
47 この人：科学技術振興機構の理事長に就任した濱口道成前総長	10. 3 (土)	中日 (朝刊)
48 広報あいち：赤崎 勇本学特別教授と天野 浩未来材料・システム研究所教授が愛知県名誉県民章を授与される	10. 4 (日)	中日 (朝刊) 他3社
49 日本・スウェーデン学長サミット開催：3日 日本側の主催者となった松尾総長は「この会議が両国の緊密で戦略的な協力関係につながることを期待する」と語る	10. 4 (日)	朝日 (朝刊)
50 附属中央図書館で中国を代表する作家・郁 達夫が旧制八高に入学して100周年になることを機に、記念展示会を開催	10. 4 (日) 10. 7 (水)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
51 野依良治本学特別教授は、北里大学特別栄誉教授大村 智氏の2015年ノーベル生理学・医学賞受賞について、「人類の福祉に最も貢献した人に授けるといふノーベルの遺言に合致する。世界の科学者が喝采する出来事」と語る	10. 6 (火)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
52 上村大輔本学名誉教授は北里大学特別栄誉教授大村 智氏の2015年ノーベル生理学・医学賞受賞について、「本当によかった。苦学されてきた憧れの先輩。国の宝です」と語る	10. 6 (火)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
53 福山 透創薬科学研究科特任教授は、北里大学特別栄誉教授大村 智氏の2015年ノーベル生理学・医学賞受賞について、「すごいのに気さくな方で全然偉ぶらない」と語る	10. 6 (火)	中日 (朝刊)
54 天野 浩未来材料・システム研究所教授は北里大学特別栄誉教授大村 智氏の2015年ノーベル生理学・医学賞受賞について、「自分のことのように大変喜んで。アフリカの多くの人の命を救ったとのことで、まさに救世主ですね」と語る	10. 6 (火)	中日 (朝刊) 他4社
55 横島 聡創薬科学研究准教授は、北里大学特別栄誉教授大村 智氏の2015年ノーベル生理学医学賞受賞について、「とてもうれしい。幅広く様々な化合物を微生物から見つけられているのが大村先生の功績。いつかは、受賞されると思っていた」と語る	10. 6 (火)	朝日 (朝刊)
56 日本人ノーベル賞受賞者で野依良治本学特別教授、益川敏英同特別教授、小林 誠同特別教授、下村 脩同特別教授、赤崎 勇同特別教授、天野 浩未来材料・システム研究所教授が取り上げられる	10. 6 (火) 10. 7 (水)	中日 (朝刊) 日刊工業 他4社
57 備える3.11から 災前の策 第120回想定シリーズ18避難所での要援護者対応：横内光子医学系研究科准教授はストレス和らぐ支援が必要と語る	10. 6 (火)	中日 (朝刊)
58 本学など東海地方の国立大学5大学と投資会社「日本ベンチャーキャピタル」が連携して大学発ベンチャーを支援する「名古屋大学・東海地区大学広域ベンチャーファンド」を創設すると発表	10. 7 (水) 10. 8 (木)	読売 他2社 日刊工業
59 益川敏英本学特別教授は東京大学教授梶田隆章氏の2015年ノーベル物理学賞受賞について「ニュートリノ実験の実力からみて受賞は当然だ」と語る	10. 7 (水)	中日 (朝刊) 他3社
60 赤崎 勇本学特別教授は東京大学教授梶田隆章氏の2015年ノーベル物理学賞受賞について「湯川秀樹先生に始まる日本の素粒子物理学の伝統の上に輝かしい成果を上げられました」と語る	10. 7 (水)	毎日 (朝刊) 読売
61 小林 誠本学特別教授は東京大学教授梶田隆章氏の2015年ノーベル物理学賞受賞について「ニュートリノの質量の発見はその後の素粒子研究の方向に大きな影響を与えたもので、受賞は当然と言えます」と語る	10. 7 (水)	読売
62 杉山 直理学研究科教授は東京大学教授梶田隆章氏の2015年ノーベル物理学賞受賞について「ニュートリノが振動することがまだ分かっていない時期に、地道に研究を続け、結果を残したところに彼の誠実な人柄が表れている」と語る	10. 7 (水)	中日 (朝刊)
63 伊藤好孝宇宙地球環境研究所教授は東京大学教授梶田隆章氏の2015年ノーベル物理学賞受賞について「人の能力を引き出して、研究に向かわせるのが上手な人。本当に良かった」と語る	10. 7 (水)	中日 (朝刊) 他2社
64 社説：梶田氏に物理学賞 赤崎 勇本学特別教授、天野 浩未来材料・システム研究所教授が2014年にノーベル物理学賞を受賞したことが取り上げられる	10. 7 (水)	日刊工業
65 社説：ノーベル連続受賞 研究のリレーは続く 故坂田昌一本学名誉教授が取り上げられる	10. 7 (水)	中日 (朝刊)
66 天然物化学 名大に脈々 北里大学特別栄誉教授大村 智氏も指導を受けた中西香爾本学特別教授など、故平田義正本学名誉教授の研究室を源流に本学に受け継がれている	10. 7 (水)	中日 (夕刊)
67 「ノーベル街道」国道41号脚光 富山一神岡一名古屋 受賞続く 野依良治本学特別教授、益川敏英同特別教授、小林 誠同特別教授、下村 脩同特別教授、赤崎 勇同特別教授、天野 浩未来材料・システム研究所教授が取り上げられる	10. 7 (水)	中日 (夕刊)
68 三好由純宇宙地球環境研究所准教授らと宇宙航空研究開発機構などのグループはオーロラが瞬く仕組みの解明	10. 8 (木)	中日 (朝刊)
69 経済観測：カリフォルニアの記録的大干ばつ 丹羽宇一郎本学名誉博士	10. 8 (木)	毎日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成27年9月16日～10月15日]

記事	月日	新聞等名
70 ノーベル賞 北里大学特別栄誉教授大村 智氏の2015年ノーベル生理学・医学賞受賞 2011年に承認されたエーザイ株式会社の抗がん剤「エリ布林」は本学のグループが80年代に化学構造を明らかにした物質を元に作られたと取り上げられる	10. 8 (木)	朝日 (朝刊)
71 天声人語：野依良治本学特別教授の北里大学特別栄誉教授大村 智氏へのことば「(受賞が) 平和賞であっても不思議ではない」が取り上げられる	10. 8 (木)	朝日 (朝刊)
72 内田 良教育発達科学研究科准教授が発起人の一人となり、スポーツ中の事故を防ぐことを目的に「青少年スポーツ安全推進協議会」が設立される	10. 8 (木)	毎日 (夕刊)
73 読書の秋 今年は科学書 益川敏英本学特別教授と2015ノーベル物理学賞を受賞した東京大学教授梶田隆章氏らとの共著「自然と謎と科学のロマン (上)」に注文が殺到し2千部を増刷	10. 8 (木)	日経 (夕刊)
74 医学部附属病院とトヨタ自動車株式会社が共同で、産業界の品質管理手法を医療に生かそうと医療の安全と質向上を担う人材育成に乗り出した	10. 9 (金)	読売
75 大村さん研究「名大に根源」野依良治本学特別教授が「天然物有機化学の柱は、名大の故平田義正本学名誉教授一門の流れだ。大村さんも若き日に、東京教育大学(現筑波大)の研究生として師事したのが、中西香爾本学特別教授だった」と語る	10. 9 (金)	中日 (朝刊)
76 理論と実験 両輪に発展 ノーベル賞7人 日本の素粒子研究 益川敏英本学特別教授は「湯川先生以来、『理論』が得意と思われているが、日本人の性格に本当に合っているのは『実験』」と語る	10. 9 (金)	朝日 (朝刊)
77 輝くニュートリノ④:「ノーベル賞 もう一つ」伊藤好孝宇宙地球環境研究所教授は「2002年のノーベル賞受賞理由に質量の発見は含まれていなかった。『もう1つノーベル賞をとれる、頑張ろう』と、同僚たちと盛り上がったのを覚えている」と語る	10. 9 (金)	読売
78 第18回全日本学生グライダー新人競技大会：本学が出場	10. 9 (金)	朝日 (夕刊)
79 本学や愛知県がんセンター愛知病院などの研究グループは血液中にわずかにあるがん細胞を見つけて取り出す検査装置を開発し、新井史人未来社会創造機構教授は「臨床試験で精度を確かめて10年以内の実用化を目指す」と語り、増田泰輔工学研究科助教は「診断のために、臓器の組織を取る必要がなく、患者の負担が少ない」と語る	10.10 (土)	読売 他5社
80 これがガッテン流！健康法の極意だー不老町で不老長寿宣言！？ー開催：17日 文学部2階237講義室で行われ、元NHK「ためしてガッテン」専任ディレクターが健康法について話す	10.10 (土)	朝日 (朝刊)
81 中田龍三郎情報科学研究科研究員は一人の食事でも、鏡に映る自分の姿を見ながら食べると、鏡なし場合より食べ物をおいしく感じるとの実験結果を発表	10.11 (日)	毎日 (朝刊)
82 感染症 手軽に早期診断 本学では狂犬病関連のウイルスの調査が行われている	10.12 (月)	日経 (朝刊)
83 丸八会頭彰：天野 浩未来材料・システム研究所教授は受賞について「支えていただいた皆様のご尽力のおかげ。若い人たちが新しい名古屋、日本、世界を築く礎になれるよう精進を重ねたい」と語る	10.14 (水)	中日 (朝刊)
84 高田広章未来社会創造機構教授は車載制御システムの組み込みソフトウェアプラットフォームを開発する大学発ベンチャー「APTJ」を10月に立ち上げた	10.14 (水)	日経 (朝刊)
85 GaN 研究コンソーシアム発足記念シンポジウム開催：14日 天野 浩未来材料・システム研究所教授は「これまで独立していた研究を束ねて、効率的に社会への貢献を目指している」と語る	10.15 (木)	中日 (朝刊) 日刊工業
86 ニュース複眼：ノーベル賞ラッシュは実力か 経済団体連合会会長榊原定征氏本学卒業生は「(科学技術費について) 国費を投じる規模が少なく『国内総生産比で1%確保』を」と語る	10.15 (木)	日経 (朝刊)
87 東海経済シンポジウム開催：11月5日 丹羽宇一郎本学名誉博士の講演	10.15 (木)	朝日 (朝刊)

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

10月21日(水)～1月30日(土)

場 所：附属図書館医学部分館
2階入口ホール

時 間：9:00～20:00(平日、
1月5日～7日は17:00まで)、
13:00～17:00(土曜日)

休 館 日：日・祝日、12月27日～1月4日

入 場 料：無料

附属図書館医学部分館ミニ展示会

「名古屋のセンパイ！ 明治編

—名古屋大学全学同窓会大学支援事業①—

内 容：明治4年(1871年)の名古屋大学創基から昭和22年(1947年)の名古屋帝国大学が名古屋大学へと改称されるまでの、本学の前身校に在学、在職した著名人に関連する、入手が困難になりつつある古書も含めた図書、文書、写真、絵葉書等によるコレクションを展示公開する

[関連特別講演会]

1月27日(水)

場 所：医学部基礎研究棟 1階会議室 2

時 間：10:00～11:30

講演題目：「尾張医学の大先輩 伊藤圭介—その医学と本草学」

講 演 者：山内一信(本学名誉教授)

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

附属図書館医学部分館 052-744-2505



11月7日(土)～3月12日(土)

(期間中の土曜日 全8回)

場 所：経済学部2階
カンファレンスホール

時 間：10:00～12:00

対 象：中学生以上、一般

参 加 費：無料

名古屋大学オープンカレッジ

「自由奔放！サイエンス—知識・博学への挑戦」

内 容：大学の研究室で行われている最新の研究やその熱意をできるだけわかりやすく伝える

[問い合わせ先]

経済学研究科

エクステンション・サービス

ecoextender@soec.nagoya-u.ac.jp

11月10日(火)～1月23日(土)

場 所：博物館2階展示室

時 間：10:00～16:00

休 館 日：日・月曜日、

12月27日～1月4日

入 場 料：無料

第31回博物館企画展

「北の縄文人—豊かな海と山にかこまれて—」

[関連特別講演会]

12月5日(土)

場 所：博物館3階講義室

時 間：13:30～15:00

講演題目：「木彫りになったクマクマと尾張徳川家の意外な関係—」

講 演 者：大谷茂之氏(八雲町教育委員会)

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767



11月24日(火)～2月19日(金)

場 所：博物館野外観察園
セミナーハウス2階

時 間：10:00～16:00

休 館 日：土・日・祝日、

12月26日～1月3日

入 場 料：無料

博物館野外観察園セミナーハウスサテライト展示

「名大の蛾—秋～冬」

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

11月13日(金)~12月7日(月)

場 所：中央図書館 2階ビブリオサロン
時 間：9:00~21:00
対 象：一般
入 場 料：無料

附属図書館2015年秋季特別展「高木家の武」

内 容：高木家文書のなかから、高木家の軍備・軍学・武術に関わる古文書・絵図類・合戦図などを紹介する



[問い合わせ先]

附属図書館 052-789-3678

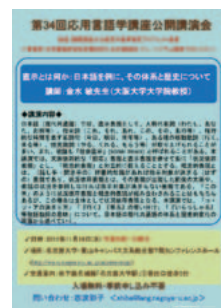
11月18日(水)

場 所：文系総合館 7階
カンファレンスホール
時 間：17:00~18:30
対 象：一般
参 加 費：無料

国際言語文化研究科
第34回応用言語学講座公開講演会

講演題目：「直示とは何か：日本語を例に、その体系と歴史について」

講 演 者：金水 敏氏 (大阪大学教授)



[問い合わせ先]

国際言語文化研究科 准教授 志波彩子
shiba@lang.nagoya-u.ac.jp

11月20日(金)、12月1日(火)、
12月8日(火)

場 所：環境総合館 1階レクチャーホール
時 間：16:30~18:30
対 象：一般
参 加 費：無料

建築学総合セミナー2015

講演題目：「Project」(11/20)

講 演 者：谷尻 誠氏 (SUPPOSE DESIGN OFFICE 代表)

講演題目：「プロポーションについて」(12/1)

講 演 者：長谷川 豪氏 (長谷川豪建築設計事務所代表)

講演題目：「アジアの都市とアジア的なもの」(12/8)

講 演 者：中川 武氏 (博物館明治村館長)



[問い合わせ先]

工学研究科 准教授 恒川和久
tsune@nagoya-u.jp

11月20日(金)

場 所：ベンチャービジネスラボラトリー
3階ベンチャーホール
時 間：15:00~17:00
参 加 費：無料

工学研究科附属プラズマナノ工学研究センター
大気圧プラズマによる超高速・超機能化異種材料接合
オープンプラットフォーム
第9回先端プラズマ技術研究会 (金三会)

講演題目：「プラズマプロセス後の表面の様子を調べよう」

講 演 者：田嶋聡美

(工学研究科附属プラズマナノ工学研究センター特任准教授)

内 容：表面反応のモデリングとプロセス後の表面計測手法のノウハウを事例を用いて紹介



[問い合わせ先]

工学研究科
附属プラズマナノ工学研究センター
052-789-3460

11月21日(土)

場 所：理学南館 1階坂田・平田ホール
時 間：13:00~16:35
定 員：300名
対 象：高校生以上、一般
参 加 費：無料

素粒子宇宙起源研究機構
一般相対論誕生100年記念市民講演会

講演題目：「一般相対論の誕生」

講 演 者：佐藤文隆氏 (京都大学名誉教授)

講演題目：「アインシュタイン最大の成功？」

講 演 者：杉山 直 (理学研究科教授)

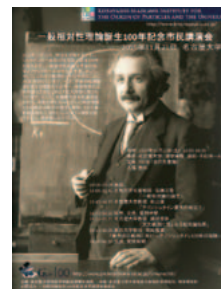
講演題目：「天文観測に見られる相対論効果」

講 演 者：國枝秀世 (本学理事)

講演題目：「重力波の観測に挑むーアインシュタイン100年の宿題ー」

講 演 者：梶田隆章氏 (東京大学教授)

内 容：時空理論とその周辺の研究の歴史、展開、そして最前線に触れる



[問い合わせ先]

多元数理科学研究科
教授 白水徹也 052-789-5577

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

11月21日(土)

場 所：多元数理科学棟 5階大講義室
(509室)
時 間：9:30~17:00
定 員：100名
対 象：高校生、高校教員、一般
参 加 費：無料

多元数理科学研究科 2015年度数学公開講座

講演題目：「ユークリッドから現代数学への道」
講 演 者：大沢健夫 (多元数理科学研究科教授)
講演題目：「計算と論理」
講 演 者：ジャック・ガリグ (同准教授)
講演題目：「素粒子論と現代数学」
講 演 者：濱中真志 (同助教)



[問い合わせ先]

多元数理科学研究科 052-789-5994

11月24日(火)

場 所：情報基盤センター 4階会議室
時 間：13:00~14:30
定 員：40名
対 象：一般
参 加 費：無料

平成27年度第8回情報連携統括本部公開講演会・研究会

講演題目：「アカデミッククラウドの動向」
講 演 者：合田憲人氏 (国立情報学研究所教授)
内 容：国内外の大学におけるクラウド利用の動向を紹介するとともに、大学におけるクラウド利用を進める上での課題とその解決方法、さらにクラウドの高度利用に向けた研究事例を紹介する

[問い合わせ先]

情報推進部情報推進課 052-789-4368

11月28日(土)

場 所：博物館野外観察園、
博物館 2階展示室
時 間：13:00~15:00
参 加 費：無料

博物館野外観察園見学会

講 師：西田佐知子 (博物館准教授)、
野崎ますみ (同研究員)
内 容：季節の花をみながら自然を学び、電子顕微鏡でミクロの自然を見る



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

12月3日(木)

場 所：日本経済新聞社名古屋支社
3階会議室 (名古屋市中区)
時 間：18:30~20:00
定 員：100名
対 象：一般
参 加 費：無料

国際経済政策研究センター・キタン会
第22回名古屋ビジネスセミナー

講演題目：「最近の金融経済情勢と展望」
講 演 者：梅森 徹氏 (日本銀行名古屋支店長)



[問い合わせ先]

経済学研究科
附属国際経済政策研究センター
052-789-4945

12月8日(火)

場 所：理学南館 1階坂田・平田ホール
時 間：16:00~17:30
定 員：250名
対 象：一般
参 加 費：無料
※夕食会は同窓会会員、学生会会員本人のみ
(参加費5,000円)

平成27年度名古屋大学全学同窓会講演会・夕食会

講演題目：「高速道路 四方山 (よもやま) 話
— 名神高速道路が全線開通して50年
高速道路の過去・現在・未来 —」
講 演 者：宮池克人氏 (全学同窓会副会長、
中日本高速道路株式会社代表取締役社長 CEO)



[問い合わせ先]

全学同窓会事務局 052-783-1920

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

12月19日(土)

場 所：博物館 2階実験室
時 間：13:00～16:00
定 員：22名
対 象：小学5年生以上、一般
参 加 費：500円(保険料)

ミクロの探検隊®

「ミクロの世界をのぞいて放散虫の進化に触れよう！」
－ 電子顕微鏡のふしぎ－



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

12月24日(木)、2月27日(土)

場 所：博物館 2階展示室
定 員：200名(立ち見あり)
参 加 費：無料

博物館コンサート NUMCo

「ジャズオーケストラによるクリスマスコンサート」(12/24)
時 間：13:00～14:00
演奏曲目：「サンタが街にやってくる」、「雪だるまつくろう」、他
出 演：フリーヒルズジャズオーケストラ



「ウクレレデュオ」(2/27)

時 間：14:00～15:00
演奏曲目：「ナブアモハラ(花は咲く)」、
「メドレー(ふるさと、浜辺の歌等)」、他
出 演：Yeh☆'ie(イエーイエ)、千田初子氏(フラ)

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

名大トピックス No.270 平成27年11月16日発行

編集・発行/名古屋大学総務部広報渉外課

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報渉外課にお寄せください。

名古屋市千種区不老町(〒464-8601)

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@adm.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ
(<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>)でもご覧いただけます。

表紙

稽古風景(剣道部)
(平成27年10月9日)



163 もう一つの豊川キャンパス — 岡崎高師と豊川分校 —

現在、名大のキャンパスといえば、東山、鶴舞、大幸、そして宇宙地球環境研究所（今年9月まで太陽地球環境研究所）豊川分室が置かれている豊川キャンパスがあります。ただ、今からちょうど50年前までは、もう一つの豊川キャンパスがあり、短い期間ながら多くの学生たちとの深い関わりがありました。現在の県立豊川工業高校（愛知県豊川市）の所在地です。

ここは、最初は名大教育学部の前身にあたる岡崎高等師範学校（岡崎高師）の校地でした。岡崎高師は、敗戦直前の1945（昭和20）年4月にその名の通り愛知県岡崎市に設置されました。中等学校の理科系教員を養成するための学校です。しかし、第1期生の入学式を挙げてまもなくの7月、岡崎空襲によって校舎をほとんど失ってしまいました。それでやむなく岡崎市を離れ、12月に移転したのが豊川の校地でした。ここは、豊川海軍工廠第二工員養成所があった所（海軍工廠本体とは別の場所）で、いったんは別の施設

の設置がほぼ決まっていたところ、豊川市の尽力で岡崎高師に提供されました。校舎も工員養成所のもものが利用されましたが、戦災で荒れ果てて「化物屋敷」のようであった建物の修復・設営作業を、岡崎高師の学生たち自らも行ったと言われていました。

1949年に新制名大に包括された岡崎高師は52年3月に廃止されますが、この期間同じ校地に併置されたのが教養部です。ただ、この時期の教養部は省令部局ではなかったため、豊川分校が正式名称でした。教養部の校舎は名古屋市の瑞穂分校（現在の名古屋市立大学滝子キャンパス）にもあり、この3年間の教養部は2カ所に分かれていたのです。「名古屋」大学に入学したと思ったら豊川に行くことになり、不満に思う名大生も多かったようです。

1952年度から教養部は瑞穂に統合され「分校」となりますが、豊川分校の跡地は農学部の附属農場として1965年まで使われました。



1	2	3
4	5	

- 1 名大豊川分校と岡崎高師の正門。向かって左の表札は読みづらいが、「名古屋大学岡崎高等師範学校」と書かれているものと思われる。
- 2 岡崎高師の実験風景。
- 3 岡崎高師振風寮祭の仮装行列。校地のすぐ隣、現在の豊川市文化会館の場所にあった振風寮は、豊川分校の寮でもあった。ここでは、黎明会（岡崎高師同窓会）が建立した記念碑がある。
- 4 岡崎高師の学生たち。後ろに写っているのは、名鉄豊川市内線（現在の名鉄豊川線）の「高等師範前」駅の駅名板。
- 5 豊川分校の教養部生たち。初年度は学生の希望を参考にしながら両分校に振り分けたが、次年度からは文、教育、法、経済、医の5学部の1年生が豊川分校に通うこととされた。